

# 令和7年度 商工観光労働企業委員会 県外所管事務調査の概要

◆調査日程 令和7年9月25日（木）～27日（土）

## ◆調査先・調査内容

### ①高野町役場（和歌山県伊都郡高野町）

#### 調査内容：観光庁の補助金を活用したオーバーツーリズム対策等について

高野町は、大阪府と奈良県の県境付近に位置する和歌山県北東部の町で、真言密教の聖地と呼ばれる高野山を有する世界でも有数の宗教都市である。約1,200年前に弘法大師空海が開創した高野山は、長きにわたり寺内町として発展してきた歴史があり、117の寺と51の宿坊がある。

大阪中心部から在来線で約2時間とアクセスが良いこと、2004年7月に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録されたことなどから、同町は人気の観光地となっている。和歌山県の統計によると、令和5年には人口約2,600人の同町に約140万人の観光客（日帰り観光客約121万7千人、宿泊観光客約20万2千人）が訪れている。中でもフランス、イタリア、スペイン、ドイツといった欧洲からの観光客が多いという特徴を持つ同町は、多言語案内表示やピクトグラムを利用した案内板が整備されているほか、外国人観光客等に配慮した洋式トイレを設置するなど、ハード面での整備も進んでいる。

観光客が増加を続ける一方で、近年では交通渋滞等による住民生活への影響が懸念されている。特に、観光客の集中する秋の紅葉シーズンは、町の中心地に駐車場を探す車が集中し問題となっている。

こうした中、高野町は令和6年3月に、観光庁の「オーバーツーリズムの未然防止・抑制による持続可能な観光推進事業」の全国20か所の先駆モデル地域の一つに選定され、官民が連携してオーバーツーリズム対策に乗り出している。本事業では、高野山の交通渋滞の緩和や持続的な参拝観光の創出に向けた取組として、交通量や車両データを収集してホームページ等で広報したり、高野山の在るべき姿を考える懇親会などを継続的に開催している。

今回の視察では、観光庁の補助金を活用して高野町が実施するオーバーツーリズム対策の詳細等について説明を受け、質疑応答を行った。

#### <主な質疑等>

- ・ごみ対策について
- ・受入側のおもてなしの質の確保について
- ・住民と観光客とのトラブルについて



## ②高野山（和歌山県伊都郡高野町）

### 調査内容：高野山における地域資源を活用した観光の現状について

高野山は、平安時代の初期に弘法大師空海によって開かれた真言密教の聖地として知られている。空海は平安時代初期に真言密教を日本に伝え、高野山に拠点を構えて修行を行ったとされている。約1200年の歴史を誇る高野山には、現在でも117の寺、51の宿坊があり、寺内町として栄えている。通常はお寺というと一つの建物を思い浮かべるが、総本山金剛峯寺という場合、金剛峯寺だけでなく高野山全体を指し、高野山全体がお寺であることを意味している。

高野山内には、山のほぼ中央に位置し全体の宗務を司っているだけでなく、国内最大級の石庭である蟠龍庭等を有している金剛峯寺、現在でも高野山の重要行事の多くが行わわれている金堂、壇上伽藍のシンボルでもある根本大塔、江戸幕府初代将軍の徳川家康と2代将軍の徳川秀忠を祀る靈廟である徳川家靈台など、数多くの歴史的・宗教的価値を持つ建築物等があるだけでなく、都会では感じることのできない自然の美しさもあり近年では海外から多くの観光客が訪れている。特に外国人観光客に人気があるのは、弘法大師空海の御廟がある奥之院エリアとなっており、全長約2キロメートルにわたる参道には、有名企業から著名人、戦国武将等の無数のお墓・慰靈碑が点在しており、総数1,300を超えると言われる大杉に囲まれ、特別母樹林として登録されているものもあるなど、豊かな自然もある場所となっている。飲食店などが夕方で閉まってしまう地域性から、夜になると時間を持て余す観光客が多い中、奥之院で開催されているナイトツアーや外国人観光客に大人気となっている。

今回の視察では、高野山の歴史、観光客の状況等について説明を受けた。また、宇佐神宮等の歴史的建造物を有する本県観光の参考とするため、海外観光客に人気の場所を巡りながら質疑応答を行った。

#### <主な質疑等>

- ・奥之院エリアの現状について
- ・外国人観光客の状況について
- ・宿坊ビジネスの現状について



### ③高野山麓ツーリズムビューロー（和歌山県橋本市）

#### 調査内容：体験型観光等の観光コンテンツについて

和歌山県橋本市は、和歌山県北東部に位置する人口約5万8千人の都市で、大阪府、奈良県と接する交通の要衝である。紀伊半島、高野山への玄関口でもあり、古くは宿場町として栄えていた。そのため、町全体に宗教文化や参詣の名残が残っている。現在も京阪神からアクセスしやすい立地が魅力となっており、大阪市内へ通勤・通学する人々のベッドタウンとしての側面も持ち合わせている。

産業面では、一次産業への従事者が多いが、橋本市から大阪府内へのアクセスの良さが影響し、近年では後継者不足に陥っている。他の産業では、橋本市の地場産業である高野口パイル（シェニール織物）や国の伝統的工芸品にも指定されている紀州へら竿などが有名となっている。パイル織物については、全盛期と比較すると生産量が減少しているものの、電車、バスの座席に使用されている生地の多くは橋本市で生産されたものとなっている。

そういった中、高野山と山麓の魅力を伝え、交流人口を拡大し、地域経済の活性化を支援することを目的として、2017年10月に高野山麓ツーリズムビューローが設立された。高野山麓ツーリズムビューローは地域連携DMOであり、橋本市と隣のかつらぎ町を対象エリアとしている。自然と歴史・文化をいかした体験型観光を中心とした高野山麓エリアの観光資源を広域的に結び付け、情報発信や旅行商品の造成、観光人材の育成を行っている。特に、高野山観光に訪れる国内外の旅行者を橋本市へ誘導し、滞在型観光につなげる取組を進めている点が特徴となっている。

高野山麓ツーリズムビューローは、理事長をはじめとして観光・商工・農業・金融機関・大学・行政など幅広い関係者が参画し、社員総会や理事会で方針を共有しながら官民一体で運営されている。専従職員は観光・旅行業の経験者を中心に配置され、マーケティング、プロモーション、旅行商品造成などを担っている。

今回の視察では、観光コンテンツ、特に体験型観光等についての取組を中心に説明を受け、質疑応答を行った。

#### ＜主な質疑等＞

- ・観光を利用した地域おこしの内容について
- ・外国人に人気の旅行コンテンツについて
- ・今後開発していきたい旅行コンテンツについて



#### ④大分県大阪事務所（大阪府大阪市北区梅田）

##### 調査内容：大阪事務所における観光振興、企業誘致等の取組について

大分県大阪事務所は、関西圏における大分県の営業拠点として、北は名古屋を中心とする愛知県から東海、関西、四国、中国地方（山口県を除く）まで広範囲にわたって管轄をしている。

主な業務は、観光の誘客促進、県産品の販路開拓、農林水産物の販路開拓やPR、企業誘致、移住定住の促進、U I Jターン希望者や新卒者に対する就職情報の提供、大分県関係県人会等との交流や活動支援、大阪・関西万博を活用した大分県の情報発信など多岐に渡っている。

特に、今年は大阪・関西万博の開催年であることから、この機会に大分県をPRするために様々な取組を行っている。8月には、1か月間に渡って大阪駅に隣接したKITTE大阪に大分県の期間限定アンテナショップを出店して物産等の販売を行った。特に8月23日、24日の2日間は、催事スペースも貸切り、大分データと銘打って大々的にPRし、近隣の飲食店エリアでは、カボスを使用したメニューを提供してもらうフェアも実施した。また、9月3日から5日にかけては、万博会場内において九州7県の知事も参加した合同催事を開催するなど、万博会場内外において積極的に大分県のPR活動を行っている。

今回の視察では、大阪事務所における大阪・関西万博関連の取組のほか、観光の誘客促進、企業誘致等の商工観光労働企業委員会に関連する業務を中心に説明を受け、質疑応答を行った。

##### ＜主な質疑等＞

- ・誘致企業が大分県内で設備増設をすることとなった理由について
- ・大分県と関わりのある企業、店舗等との連携について
- ・県内の市町村と連携した活動等について



## ⑤大阪・関西万博（大阪府大阪市此花区夢洲）

### 調査内容：大阪・関西万博について

大阪・関西万博は、2025年4月13日から10月13日までの184日間にわたって、大阪市夢洲で開催されている。日本における万博開催は、2005年の愛・地球博以来20年ぶり6回目となる。今万博は158の国と地域、7つの国際機関が参加しており、海外パビリオンの数は万博史上最多となっている。

大阪・関西万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」となっており、かつての万博が重視していた国威発揚や経済成長から転換し、成熟した社会において、一人一人のいのちがいかに幸福に生きるかという問いを世界に投げかけている。

コンセプトは「未来社会の実験場」となっており、完成された技術を見るだけではなく、会場 자체を巨大な実験場と位置付け、世界中の企業・研究者・来場者が一体となつて協力して創り上げる「共創」を目指している。そして、万博をゴールとするのではなく、そこで得られた知見を今後の社会へ実装していくことが、今万博の本質とされている。

万博会場内外においては、特定の条件下において、システムが全ての運転タスクを実施するレベル4の自動運転や走行中給電等の技術を融合させ、会場の外周を走る自動運転バス（e-Mover）、水素と空気中の酸素のみを使い、運航時の二酸化炭素排出量がゼロとなる燃料電池で発電した電気とプラグイン電力のハイブリット動力で運行する水素燃料電池船（まほろば）、薄い、軽い、曲がるといった性質を持っている次世代軽量太陽電池ペロブスカイト太陽電池など、最先端の技術がインフラとして実装されている。

また、日程の都合により視察することはできなかったが、大分県の万博会場内における取組としては、日本一の地熱発電などの再生可能エネルギーのPR、九州7県合同催事における食、観光スポットや地域資源のPRなどを行っていた。

今回は、閉幕間近となっている大阪・関西万博の様子を視察した。

